

# 乳児保育室の空間変成と“子ども及び保育者”の変化

—K保育所0歳児クラス：自由遊び時間におけるアクションリサーチ—

基礎教育学コース 村上博文

The Effect of a Space Design of Nursery Room to Young Infants Behavior and Child Care Worker

—On Focusing Design of Space in Free Playing Time—

Hirofumi MURAKAMI

The purpose of this study is to make clear influence to young infants of "space design of nursery room". A space of nursery room was designed by child-care person two times. At first stage table-chair was set near the window. At Second stage, some partitions was set in room. And the room was constituted three spaces. One was a Dynamic-playing space, the others were a table-chair space and a free space.

In free playing time after changing space design of nursery room, three young infants were more stable before. Then Qualities of activity (steadiness, concentration) were improved, too. And child-careers also watched child activities more detail. In summary design of space was effected to space of young infant's activity. From the results design of space in nursery room is an important environmental factor of considering nursery room.

## 目次

はじめに

- 1 自由遊び時間における空間変成
  - A 空間構成の変更前
  - B 第1ステージ
  - C 第2ステージ
- 2 保育室の空間変成と子どもにおける変化
  - A 子どもの遊びをとらえる視座
  - B 子どもの遊びにおける変化
- 3 保育室の空間変成と保育者における変化
  - A 子どもへのかかわりをとらえる視座
  - B 子どもに対するかかわり方の変化

おわりに

はじめに

乳児保育に対する社会的期待が高まりつつある現在、都市部を中心に乳児保育を拡充する動きが広がっている。そのニーズに応えようと、定員を超過して乳児を預かる保育所も少なくない<sup>1)</sup>。また日々の保育に目を向けると、これまでの経験と勘を頼りに実践を行っているのが実際であり、乳児保育に取り組んで間もない保育所では試行錯誤の状態が続いている。乳児

保育が一般化されつつある今日、乳児保育の貴重な実践に学びながら、乳児保育の基礎理論を確立することが求められている。

その際に1つの鍵になるのが、「環境」である。2009年4月に施行された『保育所保育指針』では前指針に引き続き、「環境を通しての保育」が保育の基本として位置づけられている。環境には、人的環境をはじめとして、物的環境や社会的環境などもある<sup>2)</sup>。これまでの研究を振り返ると、子どもとかわる人的環境である保育者に目を向けた研究が中心であり、物的環境に着目したものは少ない。近年、物的環境にも着目した研究として、保育室のトイレに目を向けた研究や園庭改善に取り組んだ研究がある。さらに保育室における音環境の実態を調べた研究として、志村洋子らによる調査もある。しかし従来の研究では、実際に環境の変化が保育や子どもにあたる影響について必ずしも明らかにしているわけではない。今後はより実証的に調べる研究が求められる<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、様々な保育環境のなかから、まず、保育室の「空間構成」に着目することにした。空間構成に目を向けたのは、保育室の空間構成が保育園によってかなり異なっているからである。家庭の延長という視点から空間を仕切って小さな部屋で少人数の

子どもが生活できるように配慮している園もあれば、1つの広い部屋に20名以上の子どもが生活している園もある。後者の場合、空間構成という点からみて子どもが生活する家庭とはかなり異なる状況であり、子どもの発達にとって適切であるのかどうかを検討する必要がある<sup>4)</sup>。

まず2005年には、埼玉県内にあるI保育所の協力を得て、単一空間の保育室にブースを設置して仕切り、空間構成の変化が子どもにあたえる影響を調べた。当時の保育室は66㎡からなり、8名の保育者が23名の子どもを保育していた。自由遊びの時間における空間構成を変更させながら実践をしていくなかで、子どもの遊びだけでなく、保育者の子どもへのかかわり方もまた変わってきたことが明らかになった。それと同時に、2つの問題点が浮き彫りになった。その1つは、空間を仕切するために使用したブースが、保育室という場になじまなかったり、遊具の要素が強かったという点である。またもう1つは、アクションリサーチ的方法を取り入れながらも、現実には研究者主導になりがちであったという反省である<sup>5)</sup>。

上述した点をふまえて取り組んだのが、神奈川県川崎市にあるK保育所における実践である。乳児保育室の空間変成につれて子どもの行為や保育者にどのような影響をあたえるのかを、本研究では、アクションリサーチ的に明らかにしていく。K保育所の0歳児クラスでは、自由遊び時間における保育室の空間構成をどのように作り替えていったのだろうか、それにともない子どもの遊びにはどんな変化がみられるようになったのだろうか、また保育者にはどのような変化が現れることになったのだろうか。以上の3点について明らかにしながら、環境構成を考える意味を考える。

## 1 自由遊び時間における空間変成

### A 空間構成の変成前 (2007年4月～2007年9月：図1-1)

これまでK保育所では、保育環境のなかでも人的環境に関心を寄せてきた。それゆえにK保育所にとり今回の取り組みは、人的環境に加えて物的環境にも目を向けていく機会になった<sup>6)</sup>。K保育所及び0歳児高月齢クラス(以下、0歳児クラス)の詳細については表1を、また空間変成の概要については表2を参照されたい。

9月時点の保育室は、畳が一面に敷かれた単一空間であった。保育室と廊下は90cmの柵で区切られてい

たが、保育室は廊下に向かってオープンの状態になっている。そのために、保育室で遊んでいる子どもからは廊下にいる保育者や友だちが、逆に廊下にいる保育者からは保育室で遊んでいる子どもが見える状態であった。隣の0歳児低月齢クラスとはスライド式の仕切りで、反対側の1歳児クラスとは収納式押入柵(高さ200cm)で区切られている。押入柵の上部は空いており、廊下に対して部屋がオープン状態であることから、1歳児クラスで音楽をかけると0歳児室に音が漏れてくることもあった。

午後の自由遊び時間になると、保育者は収納式の押入柵からおもちゃ等を取り出し、部屋の中央付近に置く。おもちゃの種類はその日によって異なり、自由遊びの時間において前半と後半でおもちゃが変わることもあった。子どもたちは畳の上に広げられたおもちゃ等を囲むようにして集まり、それぞれ興味のあるものを手にして遊び始める。じっくり遊んでいる子どもがいる一方で、おもちゃを手にしても部屋中を「フラフラ」と歩きまわったり、まわりを「キョロキョロ」したりする子どももいた。またときには、子どもたちが急に踊り出すこともあった。というのは、1歳児クラスでかけている音楽が、0歳児クラスに流れてきたからである<sup>7)</sup>。

K保育所の0歳児室は、仕切りのない単一空間であるという点で、一昨年前にかかわった埼玉県内にある保育所の0歳児室と基本的に変わらなかった。また保育者が押入等からおもちゃを出す点や、部屋を「フラフラ」と歩きまわったり、まわりを「キョロキョロ」したりする子どもが目立つという点においても、2つの園では共通していた。

### B 第1ステージ (2007年11月～2007年12月：図1-2)

まずは、自由遊びの時間について振り返るために、事前にビデオカメラで撮影した映像をクラスで視聴した。保育者からは、「思っていた以上に子どもが集中して遊んでいない」「何か落ち着きがない」という感想が出てきた。そして「子どもがもっとじっくり落ち着いて遊べるためには保育室の空間構成をはじめ環境条件をどのように工夫したらよいのだろうか」という課題が持ちあがった。さっそく課題についての話し合いがなされたが、話は予想以上に進まなかった。その背景には、今回の取り組みが、保育者にとってこれまでの保育室に対するイメージを払拭して、改めて考え直す機会であったからであろう。

そこで、保育室の空間構成をいきなり変えようとす

るのではなく、さしあたりビデオ視聴後の話し合いのなかで保育者から出ていた「窓際に1つのコーナーを作ったらどうか」というアイデアから実現して見るようになった。畳の上にピンクの布を敷き、段ボールで作ったテーブルと椅子のセットを置いて、ままごとコーナーを保育室の一角に作った。コーナーの上には、西日の光があたるときれいに輝くように、セロファンで作った飾りが吊された。またコーナーの隣には、2-3人の子どもが入れる小さな家を設置した。その結果、単一の空間であった保育室の一角には、ままごとコーナーが登場した。

窓際のみまごとコーナーには、多くの子どもたちが集まってきた。また家の中に隠れ込むかのように入っていく子どもも現れた。そして保育者も、子どもが遊んでいるままごとコーナーや家の近くに座る機会が多くなった。それだけでなく、保育室内を縦横無尽に歩きまわる子どもが少し減っていった。子どもたちの変化を肌で感じた保育者は、保育室の空間構成を考えたことの大切さを実感していた。それと同時に子どもたちにみられた変化は、保育者を次なるステージに向けての意欲をかき立てるものにつながっていった。

### C 第2ステージ（2008年1月～3月：図1-3）

第2ステージもまた、前回と同様に、自由遊びの様子を撮影したビデオ映像を視聴することから始まった。窓際に作ったままごとコーナーに対して、保育者からは、「子どもたちがままごとコーナーに集まり、

よく遊んでいる」「家の中では子どもがなごんでいる」などの感想が出された。その一方で、「部屋の一角にコーナーができたけれども、保育室全体からみれば改善の余地はまだまだある」という意見も保育者から出てきた。しかし前ステージのときと同じく、保育者から空間構成の改善について具体的なアイデアはでてこなかった。そこでその手がかりを求めて、自由遊びの様子を撮影した他園のビデオを視聴したり、実際に他園を見学したりすることになった。

その経験を生かして、保育室の空間構成を改めて作り替えることになった。広い保育室を仕切るために、段ボールで仕切り（高さ60cm、幅30cm、奥行き90cm）を制作した。それを部屋の中央に3つ並べ、窓際を静的遊びの空間に、入口側を動的遊びの空間にした。静的遊びの空間では、第1ステージに引き続き、ピンク色のカーペット（布製）を敷き、テーブルセットを置いてままごとコーナーを作った。その横には、第1ステージ同様に家を設置したが入口部分にはトンネルを付け加えた。畳のコーナーは、積み木などの玩具で遊ぶ場所にした。また動的遊びの空間には、太鼓橋を置いて子どもが「のぼりおり」や「くぐる」などの行為ができるようにした。

保育室の空間構成が大きく変わった第2ステージでは、子どもたちには様々な行為が現われるようになった（表3を参照）。動的遊びの空間では、太鼓橋で「はいはいする」「入る（出る）」「もぐる」「のぼる」「つかむ（のぼり棒を何度も）」という行為をする子ども

表1 実施園及び実施クラスの詳細

K保育所		日課	
場所	神奈川県川崎市	7:00～	随時登園
	社会福祉施設2階	9:00～	自由遊び
設置運営主体	私営	10:30～	離乳食、授乳
		11:30～	午睡
0歳児高月齢クラス		15:00～	離乳食、授乳
保育室	22.7㎡	3200mm×7100mm	16:00～
子ども	13名	男児 7名	17:00～
		女児 6名	随時降園
		平均 1歳5カ月	
保育士	4名	正規 4名	

表2 0歳児クラスにおける実践期間

ステージ	期間	観察日
変更前	2007年4月～2007年9月	2007年9月5日 (保育士2名、子ども6名)
第1ステージ	2007年11月～2007年12月	2007年11月8日 (保育士2名、子ども8名)
第2ステージ	2008年1月～2008年3月	2008年1月18日 (保育士2名、子ども9名)

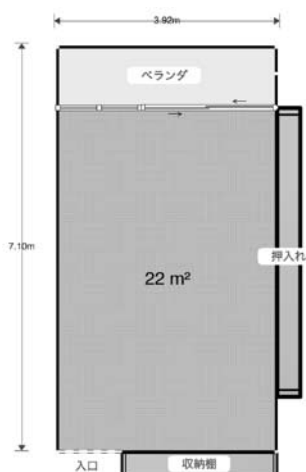


図 1 - 1 空間構成の変更前

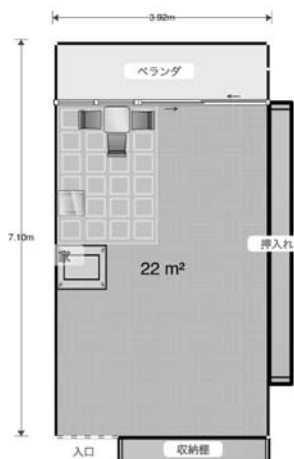


図 1 - 2 第 1 ステージ

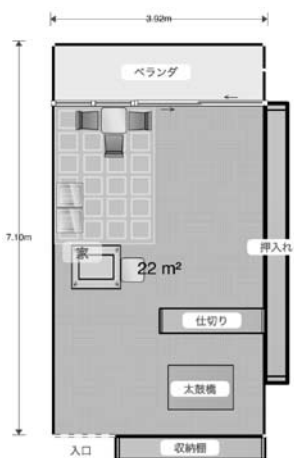


図 1 - 3 第 2 ステージ

表 3-1 A児の行為

	畳	静的遊び空間 (カーペット：家、テーブル)	動的遊び空間 (畳：太鼓橋)
変更前 (54分)	出す(入れる), 口にくわえる, わたす(もらう), はめる(はずす), 口をたたく, 手をたたく, つかまり立ちする, はいはいする	—	—
第1ステージ (59分)	出す(入れる), 読む, はいはいする, わたす(もらう), 口にくわえる, 置く, 合わせる(積み重ねる)	入る(出る), のぞく, つたい歩く	—
第2ステージ (55分)	出す(入れる), 空ける(ふたする), はめる(はずす), 模倣する, わたす(もらう), 振る, ゆらゆらする	はめる(はずす), のぞく, わたす(もらう), <u>入る(出る)</u> , 見せる, 置く	<u>のぼる</u> , はいはいする, 手を合わせる, 入る(出る)

表 3-2 S児の行為

	畳	静的遊び空間 (カーペット：家、テーブル)	動的遊び空間 (畳：太鼓橋)
変更前 (52分)	押す(引く), 手を通す, ゆらゆらする, 出す(入れる), わたす(もらう), とりあう, まわす	—	—
第1ステージ (47分)	読む, 置く, 押す(引く), わたす(もらう), 出す(入れる), さわる(さわられる), まわす	運ぶ, 模倣する, わたす(もらう), <u>のぼる</u> , 押す(引く)	—
第2ステージ (55分)	はめる(はずす), 合わせる(積み重ねる), 聞く, 出す(入れる), たたく, 模倣する, 置く, 運ぶ	はめる(はずす), 出す(入れる), 模倣する, 置く, 運ぶ, のぼる, たたく	<u>もぐる</u> , のぼる

表 3-3 R児の行為

	畳	静的遊び空間 (カーペット：家、テーブル)	動的遊び空間 (畳：太鼓橋)
変更前 (55分)	口にくわえる, 読む, はいはいする, 動かす, ひっくり返す, さわる, つたい歩く, 指差す, のぞく, 出す(入れる), 押す(引く)	—	—
第1ステージ (17分)	読む, かぶる, わたす, もらう	口にくわえる, 出す(入れる)	—
第2ステージ (27分)	置く, 運ぶ, 口にくわえる, はめる(はずす)	置く, はめる(はずす), 口にくわえる, 運ぶ, わたす(もらう), とりあう	手を振る, 口にくわえる, つかむ

が見られた。また静的遊びの空間では、ままごとコーナーにおいて「はめる(はずす)」「のぞく」「わたす(もらう)」「入る(出る)」「見せる」「置く」という行為が「畳ではおもちゃを使って「出す(入れる)」「開ける(閉める)」「はめる(はずす)」「模倣する」「わたす(もらう)」「振る, ゆらゆらする」「はめる(はずす)」「合わせる(積み重ねる)」「開く」「出す(入れる)」「たたく」「模倣する」「置く」「運ぶ」「置く」「運ぶ」「口にくわえる」「はめる(はずす)」という行為がみられた。

このように0歳児クラスでは、「子どもが落ち着き集中して遊べるように」という視点から、自由遊びの時間における保育室の空間構成を少しずつ作り替えていった。この取り組みを通じて、保育室は単一の仕切られていない空間から、第1ステージのままごとコー

ナー作りを経て、第2ステージでは手作りの仕切りによって、動的遊びや静的遊びのなどの小さな空間から構成される部屋になった。それでは保育室の空間変成を通じて、実際に子どもの遊びにはどのような変化が生じたのだろうか。また保育者にはどのような影響をもたらしたのだろうか。2つの点について、以下ではビデオ観察を通じて明らかにしていく。

## 2. 保育室の空間変成と子どもにおける変化

### A 子どもの遊びをとらえる視座

0歳児室のビデオ撮影は、空間構成の変更前と変更後(第1ステージ, 第2ステージ)に行われた。撮影時間は午後の自由遊び(16:00-17:00)で、各撮影日数は3日間である。変更後の撮影日は、過去の調査を参考

に、保育室の空間構成を変更してから約1週間後とした。撮影用のビデオカメラには部屋全体が映るように超広角レンズを付け、それを押入棚（高さ200cm）の上に設置した。

ビデオ観察に際して、保育者と相談のうえ、3名の子ども（S児：男児16カ月、A児：女児13カ月、R児：男児16カ月）を対象児として選んだ。保育者によればS児は「活発型」、A児とR児は「のんびり型」である。記録方法は、ビデオ映像を5秒単位で切り取り、各単位ごとに子どもが遊んでいる場所（畳、静的休息型ブース、動的遊戯型ブース）と行為（すべる、ならべる、おく、かさねなど）、その際の視線（一定かどうか）や他者とのかかわり（保育者、友だち）を記した。その記録から遊び場所と行為に注目して、子どもの遊び場面を区切った。

その記録にもとづき、自由遊びの時間において子どもがどれだけ活動的に、また落ち着き、集中して、さらにじっくり遊んでいるかという4つの視点から分析した<sup>8)</sup>。「活動度」とは、自由遊びの時間において頑具等で遊んでいる時間の割合である。具体的には、部屋を歩き回ったり、まわりを見ていたりする時間を除いた割合である。「落ち着き度」とは、自由遊びの時間に全行為中、部屋中を「フラフラ」と無目的に歩きまわる行為が占める割合である。「集中度」とは、自由遊びの時間における全行為のうち、視線が一定している行為の割合である。「じっくり度」については、2つの尺度を作った。1つは、1つの行為が1分以上にわたって続いた回数（1時間あたり）であり、またもう1つは1つの行為における平均持続時間である。

## B 子どもの遊びにおける変化

まず、自由遊びの時間における子どもの「活動度」からみていくことにしよう（図2）。3名の子どもの中で、保育室の空間変成につれて最も活動割合に顕著な変化がみられたのはS児である。空間構成の変更前、自由遊びの時間にS児が遊んでいる割合は43.6%である。それが第1ステージには66.4%に、さらに第2ステージになると74.2%に増える。変更前から第1ステージでは22.8ポイント、第1ステージから第2ステージでは7.8ポイントも割合が高くなる。同様の傾向はA児とR児にもみられ、保育室の空間構成を変更して以降、実際に子どもたちの遊び時間が増えていることがわかる。

次に、子どもの「落ち着き度」である（図3）。この尺度は数字が小さいほど、「落ち着い」ていることを

示している。A児をみると、空間構成の変更前には、「フラフラ」と歩きまわる割合は2.2%である。第1ステージになると7.7%に増加するが、第2ステージには若干減少して6.9%になる。変更前に比べて第2ステージでは、数値が4.7ポイント高くなる。それに対してS児とR児では、空間構成の変更以降、「フラフラ」と歩きまわる割合が次第に低くなっていく。S児では変更前が20.2%であるのに対して、第1ステージには10.6%、第2ステージには5.7%と減少していく。R児もS児と同様に、変更前は14.2%であるが、第1ステージには13.3%と微減し、第2ステージになるとさらに8.4%に減少する。変更前と第2ステージを比べると、S児では14.5ポイント、R児では5.8ポイント小さくなる。

A児のみが、空間構成の変更以降、「フラフラ」と歩きまわる割合が増加している。月齢をみると、A児は13カ月であるのに対して、S児とR児は16カ月である。A児は、空間構成を変更する頃、歩き始めるようになってまもなく、座っていることが多かった。それから次第に歩くことを楽しみ、探索活動が活発になっていったことが、今回の結果に反映されていると考えられる。逆にS児とR児では、空間構成の変更以降、「フラフラ」と歩きまわる機会が減り、「落ち着いて」遊ぶようになってきている姿がうかがえる。

さらに、子どもの遊んでいる様子を詳細にみていくことにしよう（図4）。空間変成とともに、「集中度」において、子どもたちにはどんな変化がみられたのだろうか。A児とR児では、第1ステージを境にして「集中度」が高くなる。A児の場合、変更前にはある行為中に視線が一定である割合は45.2%であるが、第1ステージになると59.3%に一気に上がる。第2ステージは59.2%とそれほど変わらないが、変更前から第2ステージとでは、割合は14.0ポイントの上昇である。同様にR児も、変更前には54.5%であったのが第1ステージには64.5%に上昇する。第2ステージになっても64.2%であり、その値は第1ステージとほとんど変わらない。ところがS児においては、A児とR児に対して異なる傾向を示す。変更前には63.0%であるに対して、第1ステージには69.0%と少し増え、第2ステージになると82.8%に急増する。変更前に比べて第2ステージでは、割合は19.8ポイントの上昇である。以上から、3名のなかでもS児はステージがあがるとともに、「集中」して遊ぶようになってきていることがわかる。

しかし疑問に残るのは、A児とR児における変化

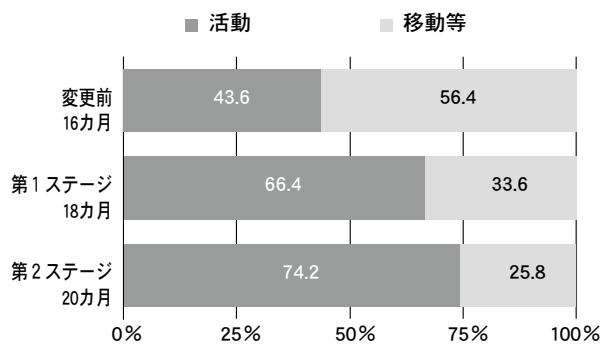


図2 活動度 (S児)

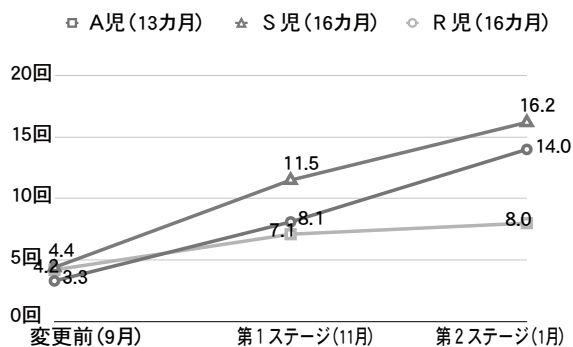


図5-1 じっくり度 (1分以上の遊び回数)

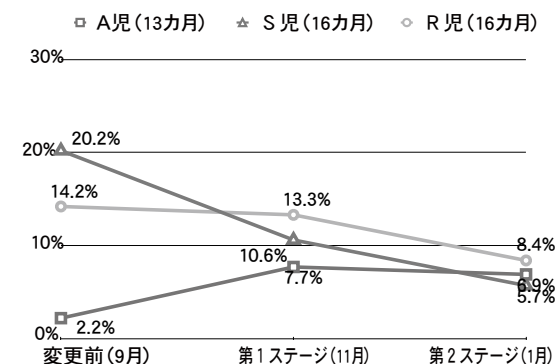


図3 落ち着き度 (「歩き回る」を除く行為の割合)

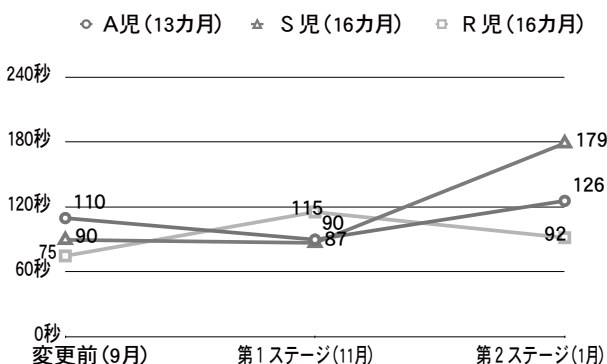


図5-2 じっくり度 (平均持続時間)

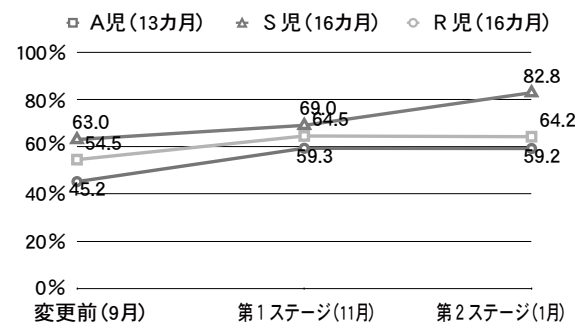


図4 集中度 (視線が一定である行為の割合)

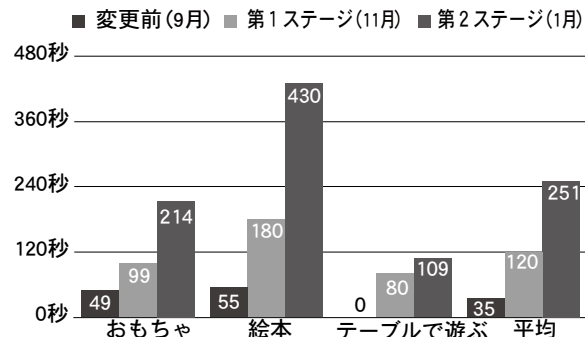


図5-3 じっくり度 (平均持続時間：遊び別)

である。空間構成の変更前から第1ステージにかけて「集中度」が高くなるが、第2ステージではそれほど変わらない。A児(13カ月)とR児(16カ月)では、月齢は異なるが、類似の傾向を示している。保育者によれば、両児は「のんびり」型であり、子どものタイプがその結果に影響しているのかもしれない。また空間構成の変更前に一番「落ち着き」がなかったS児が、第2ステージになると最も「落ち着い」ている。この結果もふまえると、空間構成の変更以降、S児が次第に「落ち着き」「集中」して遊ぶようになっていっていると言える。

子どもの遊び状況について、もう1つ注目したのは「じっくり度」である。まずは、自由遊びの時間において、子どもが1分以上にわたって1つの遊びを続けている回数を調べたところ(図5-1)、空間構成の変更以降、その回数はみな増えていく。最も顕著な増加を示しているのが、S児である。空間構成の変更前には1分以上の遊びは4.4回であるが、第1ステージには11.5回に増加し、第2ステージになると16.2回になる。変更前に比べると第2ステージでは1分以上の遊びは11.8回の増加である。次に増加傾向が高いのが、A児である。空間構成の変更前には3.3回であるが、第1ステージには8.1回に増え、第2ステージには14.0回に急増する。変更前と第2ステージを比べると、1分以上の遊び回数は10.7回も増えている。S児とA児に比べると、R児はそれほど大きな伸びを示さなかった。変更前4.2回、第1ステージ7.1回、第2ステージ8.0回と、着実に回数は増えているが、増加率はA児とS児には及ばない。

また1分以上の遊び回数に加えて、1回あたりの遊び時間も計算してみた(図5-2)。3名の子どもにおいてみな、空間構成の変更前に比べて、第2ステージには1回あたりの遊び時間が長くなっている。A児をみると、空間構成の変更前には110秒であり、第1ステージに90秒に一時減少するが、第2ステージになると126秒に増える。同様にS児も、変更前の90秒に対して、第1ステージには87秒に短縮するが第2ステージになると一気に179秒になる。変更前と第2ステージを比べると、A児では16秒にとどまるが、S児では89秒も1回あたりの遊び時間が長くなる。A児とS児に対してR児は、先と同様に少し異なる傾向を示す。変更前75秒、第1ステージ115秒、第2ステージ92秒であり、遊びの持続時間は第1ステージが一番長くなり、第2ステージにはまた短くなる。しかし変更前に比べれば、遊びの平均持続時間は第2ステージになり

17秒長くなっている。これは、先ほど述べたもう1つの「じっくり度」を示す指標、すなわち1分以上にわたる遊びの回数を調べた結果と同じ傾向を示すものである。

さらに遊びの種類に注目して、3名の平均時間を算出してみた(図5-3)。「おもちゃ(積み木、ブロック等)」では、変更前の遊び時間は49秒であるが、第1ステージには99秒に倍増し、さらに第2ステージになると214秒になる。変更前に比べて第2ステージでは、おもちゃで遊ぶ時間が1回あたり165秒も長くなる。「絵本」での遊びもまた同様の結果になっており、変更前の55秒に対して、第1ステージ180秒、第2ステージ430秒になる。変更前に比べると、第2ステージでは375秒も遊び時間が長くなる。それ以外の遊びもすべて含めて平均を出すと、変更前が35秒であるのに対して、第1ステージは120秒、第2ステージは251秒になる。以上から、ステージ上昇とともに、子どもたちが「じっくり」遊ぶようになっていっていることがわかる。

このようにK保育所の0歳児クラスでは、自由遊びの時間において保育室の空間構成を変えていくなかで、子どもたちの遊びの質が次第に変わってきている。子どもたちから部屋中を「フラフラ」と歩きまわったり、「キョロキョロ」まわりを見まわしたりする機会が減り、子どもが実際に遊ぶ割合が高くなってきている。また単に遊び時間の問題だけでなく、子どもは「落ち着き」「集中」し「じっくり」遊ぶようになってきている。それと同時に、保育室の空間構成について考えてきた保育者自身もまた、今回の試みのなかで子どもとのかかわりについての変化を感じている。その点について、次節では明らかにしていく。

### 3. 保育室の空間変成と保育者における変化

#### A 子どもへのかかわりをとらえる視座

第2ステージを迎えた頃から、保育者から「子どもが主体的に遊ぶようになった」という声と同時に、「子どもを見守ることが多くなってきた」という感想がよく聞かれるようになった。同様の感想は、K保育所だけでなく、一昨年前に実施したI保育所の保育者からも出てきたものである。保育者におけるこの実感を確認するために、ビデオ映像から3名の子どもに対する保育者のかかわり方を記録した。子どもの行動記録の中から「他者とのかかわり」の項目に注目し、KJ法を使って分類した。その結果、保育者の子どもに対するかかわりは「見守る」「共感・同調・共同(以下、



共感等)」「提供：誘導，供与（以下，提供等)」「注意・禁止・命令（以下，注意等)」「評価」「支援：励まし・援助・仲裁（以下，支援等)」の6つに分類された。それらにもとづき，各対象児に対する保育者のかかわり方をステージ別に集計した。

### B 子どもに対するかかわり方の変化

3名の子どものうち，A児とS児については，保育者のかかわり方に類似の傾向がみられる。A児（図6-1）に対して，空間構成を変更する前（波線小），最も多いかかわりは「提供等」13.2回である。次に多いのが「支援等」9.9回であり，以下「共感等」5.5回，「注意等」2.2回，「見守る」1.1回と続き，「評価」は0回である。第1ステージ（波線大）になると，A児へのかかわりは全体として減ってくる。「提供等」や「支援等」は4.0回に減り，「共感等」や「注意等」もわずかに減少する。その一方で「見守る」は，2.0回に微増する。第2ステージ（実線）になると，A児に対するかかわり方には大きな変化がみられる。「提供等」は0.7回に減り，「評価」や「注意・禁止・命令」は1回もなくなる。反対に，これまで少なかった「見守る」や「共感等」はそれぞれ4.9回と10.5回に増加する。また「支援等」は，変更前ほどではないが第1ステージに比べると8.4回に増える。これは，ステージがあがるにつれて保育が，保育者主導から子ども中心へと，また見守る方向へと変わってきていることを示すものである。

同様の傾向は，S児へのかかわり方にもみられる（図6-2）。空間構成の変更前，とくに多いのは「支援等」15.9回であるが，「提供等」も5.3回ある。また「見守る」が6.4回である一方で，「注意等」も9.1回ある。「評価」や「共感等」については，ともに1.1回しかない。第1ステージになると，「注意等」は10.6回でそれほど変わらないが，「支援等」は半分以下（6.5回）になり，「見守る」もまた3.9回に減少する。その一方で「共感等」は7.8回に増え，「提供等」も10.4回に倍増する。変更前に比べて「共感等」や「提供等」が増えている点に，第1ステージの特徴がある。そして第2ステージになると，「支援等」が21.8回と大幅に増え，「共感等」（14.1回）や「見守る」（9.9回）も増加する。その一方で，「提供等」（3.5回）や「注意等」（6.3回）は減少している。A児の場合と同様にS児に対しても，第2ステージになると「見守る」「支援等」「共感等」など，子ども中心の保育へと変わりつつある。

A児とS児に比べると，R児に対する保育者のかか

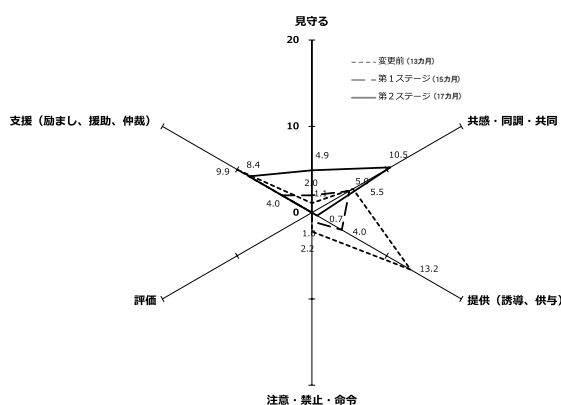


図6-1 A児に対するかかわり

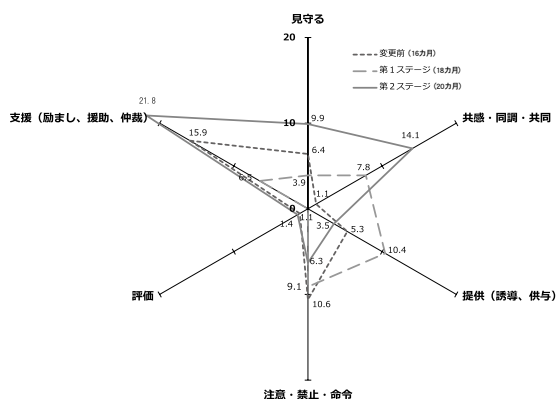


図6-2 S児に対するかかわり

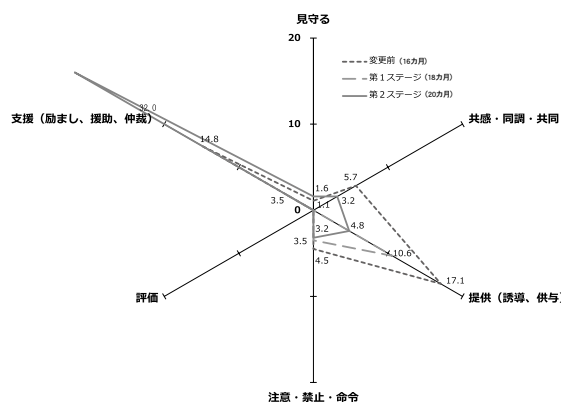


図6-3 R児に対するかかわり

わり方には違いがみられる(図6-3)。空間構成を変更する前、R児に対して「提供等」(17.1回)や「支援等」(14.8回)のかかわりがかなり多い。それ以外については、「共感等」5.7回、「注意等」4.5回、「見守る」1.1回、そして「評価」0回である。第1ステージになるとすべてのかかわりが少なくなり、「提供等」(10.6回)や「支援等」(14.8回)は大幅に減少している。「注意等」も3.5回と少なく、「見守る」「共感等」「評価」はともに0回である。そして第2ステージになると、保育者のかかわり方に変化がでてくる。「支援等」は3.5回から32.0回へと急激に増加する一方で、「提供等」は4.8回に、「注意等」は3.2回に減少する。以上からA児とS児とは異なり、R児に対して遊びを支えるように保育者がかかわる機会が増えていることがうかがえる。

興味深いのは、空間構成を変更する前の保育者のかかわり方である。A児とR児に対して一番多いのは「提供等」であるのに対して、S児においては「注意等」である。A児とR児とで「提供等」が多いのは3カ月の月齢差以上に、両者が「のんびり」型であることが影響しているにちがいない。A児とR児に対して、知らず知らずのうちに、保育者がおもちゃ等を提供してしまうのだろう。またR児とS児は月齢は同じであるが、タイプが異なる。その点で「のんびり」型のR児に対しては「提供等」が、「活発」型のS児に対しては「注意等」が多くなるとも言える。これは、子どものタイプが保育者のかかわり方に影響をあたえ可能性を示すものである。

話をもとに戻し、ステージの上昇とともに3名の子どもに対する保育者のかかわり方には変化がみられる。第2ステージを迎えてから、保育者が「子どもがじっくり遊ぶようになった」「落ち着いて子どもとかかわれるようになった」と語っていた。ビデオ観察の結果は、保育者の実感を裏付けている。自由遊びの時間における保育環境を、保育室の空間構成に着目して実践していくなかで、子どもだけでなく保育者もまた変わっていったのである。

## おわりに

本稿では、川崎市内にあるK保育所の0歳児クラスにおいて、自由遊び時間の空間構成に着目した実践を通じて、子どもと保育者に現れた変化について述べてきた。0歳児クラスでは、保育環境という視点からこれまでの保育を見つめ直すために、1つのきっかけとして、自由遊びの時間における保育室の空間構成に

着目した。自由遊びの様子を撮影したビデオ映像を見ながら自らの保育を振り返ることに始まり、他園のビデオを視聴したり、実際に見学に行ったりなどしながら、保育室の空間構成を自らの手で少しずつ作り変えていった。それにともない、自由遊びの時間において子どもたちの遊ぶ様子が次第に変わっていった。月齢差やタイプなどによって個人差、その他の影響もあるが、空間構成の変更以降、自由遊びの時間において、子どもが「活動」する割合は高くなってきている。また「落ち着い」て遊ぶようになるだけでなく、遊びに「集中」し、しかも「じっくり」遊ぶようになってきている。また、空間構成の変更以降、保育者自身にも子どもへのかかわり方に変化が現れた。空間構成を変更する前、子どもに対して保育者は、遊びのツールを提供し、遊んでいる子どもを見守りながら、ときには注意や禁止をしたりすることが多かった。しかし空間構成を変更して第2ステージになると、保育者は子どもを見守り支援するようになり、子どもと一緒に共感、同調、共同する場面が増加した。その意味で、K保育所の0歳児クラスにおける試みは、空間構成を1つの契機にして、子どもだけでなく保育者もまた変わることにつながった1つのアクションリサーチであった。

今回の結果は、乳児保育室の空間構成が子どもの行為に与える影響について、より実践現場に即したかたちで明らかにしてきたという点に、1つの意味があるだろう。一昨年に行ったI保育園における実践では、空間を仕切るために2種類のブースを設置した。しかしブースそれ自体が、保育室にはなじみにくいという一面があり、K保育所では自分たちで仕切りを制作し、保育室の空間を仕切っている。もう1つの意味は、保育室の空間変成にあたり、保育者の主体性を尊重した点である。アクションリサーチ的方法と一口に言っても、研究者のかかわり方は様々である。前回以上に、保育者が自分たちで考えるプロセスを大切にし、支援するという立場をとるように、今回はとくに心がけた。それゆえに、自分たちで作った保育環境によって子どもの遊びが変わってきたことに、保育者は大きな充実感を得ている。そして忘れてならないのは、まだまだ十分とはいえないながらも、保育室の空間構成が子どもの遊びに少なからずとも影響をあたえるという事実を子どもの姿を通じて検証したという点である。

今後は、乳児保育室の空間構成が子どもの行為に与える影響について、より精緻なデータを収集してい

くことが課題である。一口に空間を小さくすると言っても、遊びによって、また子どもの人数によって、さらに年齢によって適切な広さは異なってくるはずである。それらの視点について丁寧に配慮しながら、今後も引き続きアクションリサーチ的手法を取り入れながら、保育現場とともに研究を継続していきたい。

(指導教員 今井康雄教授)

## 謝辞

本研究に際して、K保育所をはじめ、赤ちゃん保育研究会のメンバーより協力をいただきました。この場を借りてお礼を申しあげます。なお本研究は科研費(20530754)の助成を受けたものである。

## 一注一

- 1) ベネッセ次世代育成研究所が2008年に行った『第1回幼児教育・保育についての基本調査報告書(幼稚園・保育所編)』(ベネッセコーポレーション, 2009)では、保育所の定員超過率は0歳児22.1%, 1歳児39.2%, 2歳児39.8%という結果が出ている。なお厚労省による調査では、2009年4月1日現在、保育所待機児童数は25384人である。2008年に比べて、その数は5834人の増加である。
- 2) 保育所の設置基準については、「児童福祉施設最低基準」(昭和二十三年十二月二十九日厚生省令第六十三号, 改正最終改正: 平成二十一年三月一六日厚生労働省令第三七号)の「第5章 保育所」にて記されている。50年以上も前に規定されたものであり、子どもの発達という観点から実証的研究にもとづいた改訂が求められている。
- 3) 保育環境については、汐見稔幸が最近の発達研究をふまえながら、保育における環境研究の課題と方法として、子どもが遊んでいる様子について、ビデオ観察等を通じて環境とのかかわりで細やかに記述することによって環境の果たす役割を把握していくこと、その際にアクションリサーチの手法をとり入れることの大切さについて指摘している。また本研究の位置づけを知る意味でも、無藤隆、無藤隆・塚崎京子、佐々木宏子によって整理されている保育学研究の全般的動向を参照されたい。
- 4) 生態心理学では、J. J. ギブソンのアフォーダンス理論が重要である。彼は、環境の中にあつてヒトの行為に影響をあたえる情報を「アフォーダンス」と定義する。そしてアフォーダンスによってヒトの行為がもたらされると考える。彼の考え方は、保育室の環境条件を考えることを改めて見つめ直す視点を提供するものである。日本では、佐々木正人や三嶋博之がアフォーダンス理論に詳しい。また赤ちゃん学における最近の知見についても興味深い研究があるので参照されたい。
- 5) アクションリサーチは、看護の世界をはじめ教育や保育の世界における研究の方法論として注目されつつある。実際のアクションリサーチは、様々なタイプに分けられる。例えば汐見は、アクションリサーチを「研究者と実践者が協働歩調で実践を工夫しながら、その過程を研究者が観察し記述して適切に調査を

繰り返していく」方法と説明している。保育環境に着目した研究は、河邊貴子や村上八千代によって行われてきているが、本研究の意義は「乳児保育の環境」に目を向けた点にある。

- 6) 保育室の空間構成を変更していく過程において、保育者の意識がどのように変容していくのかについて、松永静子によって丁寧な分析がなされている。空間構成を考えることの難しさ、それにとまなう葛藤、不安、戸惑い、そして生き生きと遊ぶ子どもの姿から得た確信などがリアルに記述されているので参照されたい。
- 7) 保育室の音環境については、志村洋子によって騒音計を設置した調査がなされている。その結果、70dbを超えることは珍しくなく、80dbを超えることもしばしばあることが明らかにされている。
- 8) ビデオ観察の結果については、空間構成に着目した1つの実践に対する事例研究として位置づけ、本研究の結果に対する信頼性と妥当性を高めるために、今後、より多くの実践を検証していく予定である。

## 一参考文献一

- 河邊貴子 2002 環境の改善は、幼児の遊びの展開にどのような変化をもたらすのか—遊びの充実を目指したアクションリサーチ 第1報 立教女学院短期大学紀要 第33号 pp.51-63
- 河邊貴子 2003 環境の改善は、幼児の遊びの展開にどのような変化をもたらすのか—遊びの充実を目指したアクションリサーチ 第2報 立教女学院短期大学紀要 第34号 pp.9-24
- 松永静子 2008 保育園における園内研修の自立的システムの構築: 二園交流型のアクションリサーチの試み—乳児保育室の環境構成の変化と保育者の意識変容を通して お茶の水女子大学研究科提出(修士論文)
- 村上博文・汐見稔幸・志村洋子他 2008 乳児保育室の空間構成と保育及び子どもの行動の変化—「活動空間」に注目して—こども環境学研究 第3巻 第3号 pp.28-33
- 村上八千代 2007 トイレが変われば保育も変わる—1, 2歳児用トイレの改修より 発達 第28巻, 第111号. pp.24-30
- 無藤隆・塚崎京子 2005 乳幼児保育・幼児教育の研究の動向と実践の課題子ども社会研究 第11号 pp.130-144
- 佐々木宏子 2004 保育・幼児教育児童心理学の進歩—2004年版金子書房 pp.157-178
- 無藤隆 2003 保育学研究の現状と展望教育学研究 第70巻 第3号 pp.393-400
- 佐々木正人 1994 アフォーダンス-新しい認知の理論(岩波科学ライブラリー(12)) 岩波書店
- 佐々木正人 2009 アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察—特別付録DVD-ROM動くあかちゃん事典 小学館
- 産経新聞 2006 「新赤ちゃん学」取材班著赤ちゃん学を知っていますか?—こままできた新常識 新潮文庫
- 志村洋子 2001 幼稚園・保育所における保育室内の音環境 日本音響学会大会発表論文集 pp.775-776
- 汐見稔幸 2004 乳幼児の 保育環境論保健の科学 第46巻 第9号 pp.664-669
- 渡辺桜 2008 保育行為における保育者の『葛藤』変容過程と

保育室の環境構成との関連性 子ども社会研究 第14号  
pp.91-104